

# 中国ピアノ作品を用いたピアノ教育による 中国伝統音楽の伝承

— ピアノ指導者に対するインタビュー調査から —

王 盛  
(2020年10月5日受理)

Transmission of Traditional Chinese Music through Piano Education Using Chinese Piano Works  
— From an interview with a piano instructor —

Sheng Wang

**Abstract:** This study aims to clarify the significance of Chinese piano works for piano education which focuses on the inheritance of Chinese traditional music. Interviews were conducted with instructors and piano teachers engaged in piano education in China and the following conclusions were drawn by qualitative analysis. First, four categories were extracted: “interest in piano arrangement works of Chinese traditional music,” “awareness of musical characteristics of Chinese traditional music,” “multiple functions of piano,” and “propagate Chinese traditional music with piano.” Further, it was found that although musical instruments other than piano have increased possibility of inheriting Chinese traditional music, playing piano is more suitable for the transmission of Chinese traditional music. This study thus highlights the significance of traditional Chinese piano pieces and the advantages of playing piano.

Key words: Traditional Chinese music, Chinese Piano Works, Chinese Piano Education  
キーワード：中国伝統音楽，中国ピアノ作品，中国のピアノ教育

## 1. はじめに

### 1.1 中国伝統音楽の伝承にみる現状

中国は1949年の建国以来、1978年までの長期にわたり鎖国政策をとってきた。その間、旧ソ連との一時的な交流期間を除き、外国の文化や音楽を中国に持ち込むことが禁止されていた。その後、1978年の「改革開放政策」<sup>1)</sup>以降、外国の文化や音楽が一気に中国に流入してきた。特に21世紀に入りグローバル化が急速に

進展してからは、インターネットとスマートフォンが普及するにつれ、西洋音楽とポップスが中国に大量に流入するようになり、それにおされる形で中国伝統音楽は失われつつある。これに関して、王躍華・杜亞雄(2013)は、我が国の伝統音楽文化は長い歴史をもち、後世に極めて豊かな文化遺産を残してきたが、現代の西洋文化の侵入を受け、若い世代が伝統音楽文化を学ぶ情熱が薄れ、伝統音楽が伝承の危機に直面していると述べている。中国伝統音楽を、グローバル化する現代においてどのように伝承していくのかが、大きな課題となっているといえる。

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：枝川一也（主任指導教員）、小川佳万、高旗健次、伊藤 真、大野内愛

とはいえ、こうした現状の中で、中国伝統音楽をそのままの形で継続していくことは非常に難しい。李延君(2018)が、中国伝統音楽をこのまま伝承していく

のは困難であり、どのように時代の流れに順応させていくかはわれわれが考えなければならない問題である、と述べているように、中国伝統音楽を伝承していくことは簡単ではない。そのような文脈のなかで、中国伝統音楽と西洋音楽が結びついた作品がつけられ、発展してきた。その作品にはたとえば、中国人が作曲した声楽作品、ピアノ作品、その他の器楽作品、交響曲などさまざまなものがある。とりわけ中国ピアノ作品は、中国へのピアノの伝来以降の歴史における中国ピアノ文化の構築と、今日の多数のピアノ学習者によって身近な存在となったこと、また伝統音楽の伝承を担う音楽学習者へ影響力をもつものとなる可能性等を多分に含むという点からみて、特に着目できると考えられる。

## 1.2 中国ピアノ作品に関する先行研究

馮効剛(2007)は、「中国の音楽的要素をもって創作し、中華精神を表現するピアノ曲は中国ピアノ作品である」(p.4)と述べている。その際、中国ピアノ作品は、中国人がもちうる特有の感性をもって、中国人の作曲家の思想や、中国の文化、またいわゆる中国的な旋律と和声の運用などを含んでつくられる特徴をもつものであるといえよう。周汀亭(2009)は自身の論文「論中国ピアノ作品」において、中国のピアノ音楽の発展過程を述べた上で、「二泉映月」、「梅花三弄」を取り上げ、①音楽テーマ、②五音音階、③和声、④装飾音、の4つの面から、中国ピアノ作品の創作的特徴について論じており、直前の馮の引用からいえる中国ピアノ作品の特徴とかかわって詳述している。また、陳旭(2001)は、建国以来の中国における中国ピアノ作品を、作曲技法、文化的、思想的などの視点から概観し、中国のピアノ音楽作品は楽曲構造、旋律、和声または装飾音、奏法などの面では、すでに鮮明な特徴を形成しており、中国人民の思想、審美意識と伝統音楽を表現する面で非常に貴重な作品群であると述べている。

こうした中国ピアノ作品は、1840年のアヘン戦争<sup>2)</sup>を経てピアノが中国に伝わって以降、180年余りの歴史のなかで多くつくられてきた。そしてその過程では、中国の音楽的要素や文化だけでなく、ピアノを媒体に、西洋の技法や中国人による受容も踏まえながら、中国の伝統的な音楽が取り上げられてきたともいえる。たとえば、中国において一般に知られている「瀾陽河」、「黄河」、「牧童短笛」といった中国ピアノ作品は、中国的な旋律に西洋の和声を加えてつくられており、そこでは西洋由来の技法と融合しているものの、中国人にひろく受け入れられている。中国伝統音楽との関連でいえば、それを中国ピアノ作品として編曲し

て、多くの中国人に親しまれているものもある。代百生(1999)は、中国伝統音楽を素材とし、編曲した中国のピアノ作品は、鮮明な民族スタイルをもっていて、中国のピアノ作品の中で重要な地位を占め、人民に深く愛されていると述べている。

さらに、中国ピアノ作品の創作に関して中国の作曲家に影響を与えた例として、王文(2010)の、ロシア人作曲家アレクサンドル・チェレプニン(1899-1977)に着目した研究が挙げられる。チェレプニンは、1934年から1937年にかけて、中国、日本、欧米を行き来し、中国には3回訪れているという。その間に、中国人作曲家と交流し、彼らを支援する様々な事業を行った。その一つが、中国人作曲家を対象にした「中国風ピアノ作曲コンクール」の開催であり、王文はこうしたチェレプニンの中国における音楽活動を紹介し、中国ピアノ作品の創作へ与えた影響などを明らかにしている。

そのようにして、さまざまに中国ピアノ作品が積み重ねられてくる中で、いわば「中国ピアノ文化」が発展してきたといえる。反対に言えば、中国ピアノ文化は、中国ピアノ作品の誕生に伴って成立してきた。現在、中国ピアノ作品の数は1000を超える。それらの作品は、中国の音楽に多用される五音音階を用いる旋律、自由な律動といった中国的な音楽技法や、中国的な感性および哲学思想、西洋由来の技法との融合、編曲、海外交流などの観点をもって、中国ピアノ文化を形成しうるのである。

中国でのピアノとその作品に関する歴史からみて、伝統音楽と西洋音楽の結びつきに加え、中国人による中国ピアノ作品に込められるさまざまな思想や、多くの中国人にとってのなじみ深さに踏み込んだ、今日までにおける中国ピアノ作品に着目することは、一定の意味があると思われる。

つまり中国ピアノ作品を用いることで、ピアノ学習者は中国伝統音楽独自の旋律や律動、文化的背景を感じ取ることが可能であると考えられるのである。またここまで示した先行研究のなかにみられるように、もともと存在した民謡や民族楽器のための音楽、わらべうたといった伝統音楽を編曲した作品も多く、こうした種の作品は、比較的良好に取り上げられている。そうであるならば、西洋楽器のピアノを使っている以上、完全な伝承ということは難しくとも、中国ピアノ作品の演奏を通して、中国伝統音楽についての知見を深め、さらにそうした中国伝統音楽を伝承するところへとつなげることも期待できるのではないかと。

## 1.3 本研究の目的と方法

すなわち、問われうことは、中国ピアノ作品を演

奏することによって、ピアノ以外の楽器による中国伝統音楽の伝承よりもさらにその伝承の可能性が見いだされるか、あるいは、中国ピアノ作品を演奏することが、中国伝統音楽の伝承に適しているのか、である。これは、中国ピアノ作品自体がもっている伝承的な意義、ピアノという楽器を演奏すること自体の伝承的な利点に通じている。すでに挙げた先行研究は、中国ピアノ作品の分析や取り扱いに関する研究といえる。一方、中国ピアノ作品を用いたピアノ教育による中国伝統を追究する研究は管見の限り見当たらない。

現状、中国においてピアノを学習する人は非常に多く、その点でもピアノを用いた教育に注目してよいであろう。本研究の目的は、中国伝統音楽の伝承に着目した、中国ピアノ作品を用いたピアノ教育の意義を明らかにすることである。現在、活動している中国のピアノ指導者や教育現場での教師を対象にインタビュー調査を行い、その結果をもとに分析・考察を行う手順をとる。ピアノの学習において中国ピアノ作品を演奏するというとき、それを指導する側がもつ教育観や音楽観、中国伝統音楽の伝承に対する考えや指導実践などを明らかにすることは重要であると考えられる。

## 2. インタビュー調査の概要

### 2.1 インタビュー調査を用いる意図

ピアノ作品を勉強するピアノ学習者が指導を受ける際に、指導者の発言の内容は学習者に対して大きな影響をもつ。加えて、指導者のそのような発言に結びつく音楽観や教育観は、たとえば指導者自身の演奏会においてその作品を選択するに至った理由として反映されていると考えられる。

それゆえ、その指導者の音楽や教育に関する考え方を整理した上で、指導者自身の演奏会や教育実践について調査し、中国ピアノ作品の意義性を探ることが必要になるのであって、そのとき、指導者に対するインタビュー調査が有効な手立てとなるであろう。

### 2.2 インタビュー対象者の選択

年齢や主な活動の場を幅広くとり、また対象者自身の体験に基づく音楽観や教育観をより詳細に聞き取ることができるよう、調査の時点でピアノの指導経験が15年以上である人物を対象とし、所属が音楽大学や地方の教育施設などのように異なっていることを条件にしたうえで、4名を選出した。

### 2.3 調査方法

2019年11月19日、23日、27日、29日に、対象の指導者にそれぞれの所属大学または施設で、一人40～60分程度の半構造的なインタビューを行った。中国語で相

互に意見を述べ、その録音をもとに逐語録を作成した。

インタビューは、「今までの学習経歴、演奏経歴、ピアノ教授経歴、学生 の 状 況」という質問からはじめ、次に「学生への指導における中国ピアノ作品の使用状況、学生 の 中国ピアノ作品の学習状況、指導者としての中国ピアノ作品に対する考え」について、各指導者が自由に語れるようにした。

### 2.4 データの分析方法

逐語録をもとに、データの質的分析を実施した。

- ① 対象の指導者ごとに、インタビューにより得られたデータをもとに逐語録を作成した。
- ② 逐語録から、中国伝統音楽の伝承に着目した、中国ピアノ作品を用いたピアノ教育の意義に関わる語りを抽出し、適当な文言を付与してコーディングした。
- ③ 次に、複数のコーディング間の共通点と相違点について比較・検討し、サブカテゴリーとした。
- ④ 続いて、全サブカテゴリー間での共通点と相違点について検討してカテゴリーとした。

## 3. 調査結果

### 3.1 調査対象者について

#### 3.1.1 調査対象者の情報

インタビュー対象者4名はいずれも指導経験が15年を超え、それぞれ全国水準の音楽大学、総合大学や地方師範大学、地方社会ピアノ教育施設に所属するピアノ指導者である(表1)。

表1 調査対象者の情報

対象者	性別	年齢	職業	ピアノ教授経験年数
A	男	61	南京師範大学音楽学院教授	37
B	女	38	上海音楽学院准教授、著名ピアニスト	19
C	男	48	淮陰師範学院音楽学院教授	28
D	男	36	淮安市少年宮教師	16

#### 3.1.2 調査対象者の所属

ここでは、対象者4名の所属する大学や施設について述べる。

A氏の所属する南京師範大学は国内で最もレベルが高いとされる師範大学の一つである。前身は1902年に創立された三江師範学校まで遡り、中国の高等教師教育の起源の一つとなっている伝統ある大学である。多くの著名な教育学者が教鞭をとり、多数の教育的人材を輩出している。1996年に“211プロジェクト”<sup>3)</sup> 大学に選ばれ、2017年には、中国の“双一流”<sup>4)</sup> 建設

高校にも選出された。

B氏の所属する上海音楽学院は、西洋音楽を学習するための音楽教育の拠点として1927年11月27日に上海に設立された。前身は国立音楽院であり、中国で初めての国立高等音楽学府である。中国文化部直属の、中国音楽教育における代表的な音楽大学として国内外に広く周知されており、ここから世界的な音楽家が輩出されている。

C氏の所属する淮陰師範学院は江蘇省淮安市に位置し、教師の育成を主な特色としている高等学院である。約60年の歴史の中で、地方の基礎教育と地域経済・社会の発展に重要な役割を果たしてきた。

D氏の所属する淮安市少年宮は、江蘇省淮安市に位置し、全市の青少年と幼児を対象に、文化、芸術教育活動を行う機関である。1982年に創建され、15000平方メートルの建築面積のなかでさまざまな教育活動が行われている。淮安市で唯一の芸術、文化、科学技術、スポーツが一括された青少年学外総合教育機構である。音楽を含む全8つのプログラムがあり、それらは、書道、器楽、ダンス、声楽、基類、武術、コンピュータ、文化などといった40種あまりのレッスンプログラムに細分化されている。

### 3.2 調査対象者の概要

インタビュー対象者はいずれもピアノ指導者である。学習者にピアノを教えるにあたり、彼らが中国ピアノ作品や中国伝統音楽について、あるいはピアノ指導についてどのような考えをもっているのかを、彼らの①背景、②経験、③思考という視点から整理しておきたい。

#### 3.2.1 調査対象者 A 氏の概要

① A氏は年配者で、中国建国直後の旧ソ連の音楽教育体制の下で育ち、文化大革命の激動の時代を経験した世代である。文化大革命の期間、(ソ連の音楽も含め)西洋音楽が中国国内で禁じられていたため、主に中国ピアノ作品を弾いていたという。そのほか、二胡や笛等の伝統楽器や伝統的な民謡も習っていた。それゆえ、彼は中国伝統音楽における学習体験が非常に豊富である。また「改革開放政策」が実施された1978年に、彼は南京師範大学に入学し、そこで一気に西洋音楽に触れることができたという。

② A氏は1982年に、南京師範大学を卒業し、そのまま南京師範大学のピアノ教師になった。大学でピアノ教授活動をする傍ら、中国声楽作品、中国器楽作品のピアノ伴奏者としても活躍している。

③ A氏は西洋ピアノ作品と比べ、中国ピアノ作品はまだ後れているという印象を抱いているようである。そのため、中国音楽界は責任感をもって、批判も

含めた客観的な評価、中国ピアノ作品の出版の支援といった創作環境の促進が重要であると考えている。最終的には、いわば「中国ピアノ楽派」を形成できるように、中国音楽界全体が努力しなければならないと考えている。

彼は南京師範大学で指導する中で、ピアノ学習者の多くは中国ピアノ作品に対する技術と表現について不慣れであると感じている。それは、ピアノ学習者が今まで西洋音楽作品を中心に学習してきたからであると彼は考えている。そうした不慣れな状況の中国ピアノ作品を指導するにあたっては、その創作歴史に沿って教授していくことが重要であるとし、それが、中国伝統音楽文化の発展や中国ピアノ作品の体系化につながると考えている。現在、彼は中国の童謡をピアノ曲にアレンジし、子ども向けの中国ピアノ教材の編集に取り組んでいる。

#### 3.2.2 調査対象者 B 氏の概要

① B氏は30代のピアニストであり、「改革開放」後の世代である。2000年、上海音楽学院に学生として入学してから、中国ピアノ作品に本格的に触れはじめ、上海音楽学院の作曲の教員である楊立青、桑桐、趙曉生が創作した中国ピアノ作品を多く弾いてきた。

② B氏は「最近では、譚盾や趙曉生先生の中国ピアノ作品をよく演奏します。彼らの作品はさらに高度なもので、もはや単なる旋律ではなく中国人の哲学的な視点で、中国伝統文化を復元しています。これらの作品はとても現代的で素晴らしく、中国ピアノ作品の創作における新しい試みですね」と述べ、これらの中国ピアノ作品は彼女自身の演奏スタイルに大きな影響を与えたことがわかった。彼女は現在「趙曉生の中国ピアノ作品」のピアノ独奏会を中国国内で行っており、中国ピアノ作品の普及に力を入れている。海外でも彼女はリサイタルを開催している。彼女は、「中国人として自分の身分を示す作品を使う必要がある」と述べ、リサイタルでは、外国の観衆が中国ピアノ作品を通して中国伝統音楽を感じ取れることを実感しているという。

③ B氏は「一部の学生が中国ピアノ作品を弾いている時に、音楽表現がショパンの作品を弾いているように見える現象がある」と述べ、それは音楽大学の学生達の中国伝統音楽に関する感性の欠如が重大な問題であると認識している。民族音楽や民族文化の理解が足りず、長期にわたって西洋音楽を弾いてきたために、中国伝統音楽を編曲したピアノ作品の表現がうまくいかなかったと考えている。中国ピアノ作品は五音階を基準とするものが多いために扱いが難しいが、「子ども向けの中国ピアノ作品を作る必要があります」と

述べ、幼少期から中国ピアノ作品に触れる必要性を感じている。

### 3.2.3 調査対象者 C 氏の概要

① C 氏は1993年に南京師範大学を卒業し、淮陰師範学院に就いて、ピアノ教師になった。現在、淮陰師範学院の音楽教員養成コースにおいて、ピアノを教えている。このコースの学生の多くは小・中学校の音楽教師を目指している。

② C 氏は1993年から、中国ピアノ作品を指導に使い始めたという。当時は電子ピアノによる集団授業であった。集団ピアノ授業で学生にピアノに興味をもたせるため、彼は中国ピアノ作品を使用したという。その結果、彼は「学生達は急に興味をもつようになりました」と述べており、中国ピアノ作品は、ピアノ学習への興味を喚起できると評価している。

③ C 氏は、中国ピアノ作品によって自文化の一つである伝統音楽にも触れることができ、そこからピアノ学習者の中国特有の音楽表現などにつながると考えている。彼は教育者の立場から、ピアノ学習者は自文化をもっと知るべきであり、その自文化の一つの伝統音楽を知ることは、ピアノ作品の学習によって可能であると考えている。

加えて彼は、西洋と中国の音楽文化とを結合させることが重要であるとし、それによって、中国伝統音楽の更なる発展へとつながり、新しい中国音楽の創造ができるであろうと考えている。

### 3.2.4 調査対象者 D 氏の概要

① D 氏は2003年に武漢音楽学院を卒業し、社会教育機構である淮安市少年宮に就いて、ピアノ教師になった。また彼は、少年宮で開催されるコンサートなどにおいて、ピアノ伴奏も多く担当してきた。加えて、彼が所属する少年宮には、二胡、琵琶といった中国伝統楽器から、ピアノ、ヴァイオリン、サクソといった西洋楽器まで様々な楽器による音楽学習プログラム

がある。このような中国伝統音楽と西洋音楽に触れる過程で、彼は中国伝統音楽のよさを感じるようになった。

② D 氏は教師をする中で、子どもが西洋音楽よりも突然中国ピアノ作品を弾きたいと言い、その子どもがたとえば民謡を編曲した中国ピアノ作品のリズムがよいと感じて口ずさみ、メロディーをピアノで弾く、という経験をしていると語り、D 氏は現在、中国ピアノ作品を積極的に活用し、特に中国民謡を編曲した中国ピアノ作品を多く用いている。

③ D 氏は、「ピアノはすでに中国で最も普遍的に普及している楽器で、ピアノの指導において中国ピアノ作品を用いることが、中国伝統音楽の保護と伝承に対しても効果的である」としている。中国ピアノ作品に注目する必要性について D 氏は、「中国独自のピアノ文化がある」としたうえで、「子どもたちに中国ピアノ作品を弾かせることは、音楽文化を理解するのに有利であり、自分たちの音楽文化を理解してはじめて外国の音楽文化と比較することができ、西洋の音楽文化をよりよく理解できる」と述べている。普及して使いやすいピアノが、「文化に興味をもってもらうこと」になると認識している。

### 3.3 中国ピアノ作品を用いたピアノ教育の意義

インタビュー調査の結果、中国伝統音楽の伝承に着目した、中国ピアノ作品を用いたピアノ教育の意義に関わる語りについて13のローデータが抽出され、またそれぞれに適当な文言を付与してコーディングとした。さらにコーディング間の共通点と相違点について比較・検討し、7サブカテゴリー、4カテゴリーが導き出された(表2)。

以下、カテゴリーを『 』、サブカテゴリーを【 」、コーディングを〔 〕で示し、カテゴリーごとにその特徴を示す。

表2 中国ピアノ作品を用いたピアノ教育の意義

カテゴリー	サブカテゴリー	コーディング	ローデータ
中国伝統音楽のピアノ編曲作品への興味関心	民族器楽曲の編曲	中国民族器楽曲からの編曲に対する親近感	A: 私たちの音楽ですから、きっと親近感があるでしょうね、たとえば「彩雲追月」とかね。
	童歌の編曲	童歌からの編曲に対する興味	C: 「小燕子」、「白毛女」を弾かせたりすると、子どもたちは急に興味をもつようになりました。
	民謡の編曲	四川省民謡の編曲作品が好き	B: たとえば「巴蜀絵画」とか、四川省の民謡を素材とし、編曲された作品で、旋律はとても中国的で美しいです。子どもたちはとても好きみたいで、受け入れられています。
		陝西省民謡の編曲作品が面白い	D: 彼(学生)に「陝北民謡変奏曲」という作品を弾かせています。この曲は陝北民謡旋律から始まって、だんだん変奏して行って、彼はとても面白いと感じたようです。

中国伝統音楽の音楽的特徴への気づき	中国ピアノ作品を通じた中国伝統音楽と西洋音楽の違い	音楽的要素と楽曲構造による違い	C: 中国ピアノ作品はこの点で異なっており、作品は和声よりも、旋律の線形表現が重視されている。音の変化は豊富で、テンポも比較的自由である。たとえば多くの中国のピアノ作品では最初は散板 <sup>5)</sup> があり、かなり自由で、西洋のピアノ作品ではまれである。
		旋律は五音階で表現されていることが多い	D: 中国のピアノ作品は、旋律を五音階で表現されていることが多いです。西洋の音楽を比べてみると、中国の音楽と外国の音楽は違うことが分かります。
		中国ピアノ作品の弾きやすさ	D: 西洋のピアノの作品は多くの分析と解説を行う必要がある。中国の曲は比較的簡単ですし、子どもたちにもなじみのある曲なので、上達が早く、子どもたちも興味をもったり好きになったりします。
ピアノのもつ多様な役割	ピアノを用いた多様な表現	ピアノで琵琶、二胡という伝統楽器の模倣と表現	A: 文化大革命時期間、ピアノで西洋作品を弾くのが禁じられていた。ですから、当時、伝統器楽曲や伝統民謡などを改編し、中国ピアノ作品にするのが流行していた。ピアノで琵琶、二胡という伝統楽器を模倣したり、表現したりしていました。
		ピアノによる中国伝統音楽の表現	D: 私たちの中国伝統音楽は西洋のこの楽器 (=ピアノ) でうまく表現することができて、その表現する中国人は、自分の伝統の音楽文化に誇りをもつことができます。
	中国伝統音楽の伴奏	中国声楽作品のピアノによる伴奏	A: 中国声楽作品のピアノ伴奏を弾かせることによって、学生達は中国伝統声楽作品に触れることができます。
		中国民族楽器による演奏の伴奏	D: ピアノが伴奏楽器として、よく民謡や二胡のような民族楽器の伴奏をしています。これもまた面白い現象で、ピアノが中国伝統音楽に浸透していると言え、本当に面白いですね。
ピアノによる中国伝統音楽の伝播	世界へのピアノの影響力	国際的なコンサートでの中国ピアノ作品の演奏	B: (中国ピアノ作品を使う場面の) 一つは演出です。特に海外での演出です。
	中国国内に対するピアノの影響力	中国におけるピアノの普及率	D: ピアノはすでに中国で最も普遍的に普及している楽器で、ピアノの指導において中国のピアノ作品を用いることが、中国伝統音楽の保護と伝承に対しても効果的である。

(1) 『中国伝統音楽のピアノ編曲作品への興味関心』

このカテゴリーは、【民族器楽曲の編曲】、【童歌の編曲】、【民謡の編曲】の三つのサブカテゴリーから構成された。【民族器楽曲の編曲】は、【中国民族器楽曲からの編曲に対する親近感】の一つのコーディングから抽出された。ピアノ学習者は中国器楽曲である「彩雲追月」から編曲した中国ピアノ作品に親近感をもつことが語られた。【童歌の編曲】は、【童歌からの編曲に対する興味】の一つのコーディングから抽出された。ピアノ学習者に「小燕子」、「白毛女」を弾かせると、急に興味をもつようになったと語られた。【民謡の編曲】は、【四川省民謡の編曲作品が好き】、【陝西省民謡の編曲作品が面白い】の二つのコーディングから抽出された。ピアノ学習者は中国の地方伝統民謡から編曲した中国ピアノ作品の「巴蜀絵画」「陝北民謡変奏曲」が好きであることが語られた。

(2) 『中国伝統音楽の音楽的特徴への気づき』

このカテゴリーは、【中国ピアノ作品を通じた中国伝統音楽と西洋音楽の違い】という一つのサブカテゴリーから構成された。補足しておけば、この一つのサブカテゴリーは、あらためてカテゴリーの見方をとることで伝承に役立つものとなる。すなわち【中国ピアノ作品を通じた中国伝統音楽と西洋音楽の違い】は、ピアノという同じ楽器を用いることを加味するとき、『中国伝統音楽の音楽的特徴への気づき』につながり、そのカテゴリーが、伝承に役立つ要素となるのである

(後述)。【中国ピアノ作品を通じた中国伝統音楽と西洋音楽の違い】は【音楽的要素と楽曲構造による違い】、【旋律は五音階で表現されていることが多い】、【中国ピアノ作品の弾きやすさ】の三つのコーディングから抽出された。中国ピアノ作品と西洋ピアノ作品における旋律、テンポといった音楽的要素と、楽曲構造の違い、弾きやすさが語られた。

(3) 『ピアノのもつ多様な役割』

このカテゴリーは、【ピアノを用いた多様な表現】、【中国伝統音楽の伴奏】の二つのサブカテゴリーから構成された。【ピアノを用いた多彩な表現】は、【ピアノで琵琶、二胡という伝統楽器の模倣と表現】、【ピアノによる中国伝統音楽の表現】の二つのコーディングから抽出された。西洋の楽器であるピアノを用いて、中国伝統音楽にかかわる伝統楽器の奏法の模倣と表現ができると語られた。【中国伝統音楽の伴奏】は、【中国声楽作品のピアノによる伴奏】、【中国民族楽器による演奏の伴奏】の二つのコーディングから抽出された。中国の民謡や二胡といった伝統楽器の伴奏楽器として、ピアノが中国伝統音楽に浸透していると語られた。

(4) 『ピアノによる中国伝統音楽の伝播』

このカテゴリーは、【世界へのピアノの影響力】、【中国国内に対するピアノの影響力】の二つのサブカテゴリーから構成された。【世界へのピアノの影響力】は、【国際的なコンサートでの中国ピアノ作品の演奏】の

一つのコーディングから抽出された。国外のコンサートで中国ピアノ作品を演奏することによって、西洋音楽界にも中国伝統音楽を広めることができると語られた。【中国国内に対するピアノの影響力】は、〔中国におけるピアノの普及率〕の一つのコーディングから抽出された。ピアノはすでに中国で最も普及している楽器であることについて語られた。

## 4. 考察

本研究では、中国伝統音楽の伝承に着目した、中国ピアノ作品を用いたピアノ教育の意義として、『中国伝統音楽のピアノ編曲作品への興味関心』、『中国伝統音楽の音楽的特徴への気づき』、『ピアノのもつ多様な役割』、『ピアノによる中国伝統音楽の伝播』が見出された。

### 4.1 中国伝統音楽のピアノ編曲作品への興味関心

『中国伝統音楽のピアノ編曲作品への興味関心』では、【民族器楽曲の編曲】、【童歌の編曲】、【民謡の編曲】のサブカテゴリーとあわせて、中国伝統音楽を編曲したピアノ作品を用いることが、ピアノ学習者の興味喚起に繋がり、それは中国伝統音楽への興味関心に反映されているということがいえる。

たとえばB氏は、幼少期から中国ピアノ作品を学習したほうがよいと考えている。そして「私が子どもに弾いてもらったのは、ほとんどが中国の民謡を編曲した中国ピアノ作品」であり、そうした作品のことは、子ども本人のほか、「子どものお父さんとお母さん、おじいさんとおばあさんもとても好き」と語っている。B氏へのインタビュー調査では、たとえば民謡の編曲作品としての中国ピアノ作品を弾かせることの有効性が語られ、また、旋律が好きであるという点に着目してみれば、いわば「中国的な旋律」を反映しているような旋律に子どもたちは反応を示すと考えることができる。つまり、中国ピアノ作品が中国伝統音楽を感じさせ、そうした中国ピアノ作品が好まれるということからいって、ピアノを通した中国伝統音楽の価値性が現れていると考えられる。

C氏は、師範学校でピアノの指導をしているなかで、集団授業において中国ピアノ作品を使用した結果、子どもたちはピアノに急に興味をもつようになったと語っている。そうした集団授業による教育において、興味という視点から中国ピアノ作品を用いることを重要と考えるC氏へのインタビュー調査では、たとえば童歌の編曲作品としての中国ピアノ作品を弾かせることの有用性が語られ、このことは中国ピアノ作品をもって中国伝統音楽への興味関心につなげることの可

能性を示すと考えられる。また、急に興味をもつようになったという点に着目してみれば、いわば「中国らしさ」を反映しているような音の流れに特に子どもたちは反応を示すと考えることができ、そのとき、中国伝統音楽をより身近なピアノを用いた中国ピアノ作品として扱いやすい形で提供することには一定の意義があるように思われる。これは、中国ピアノ作品の演奏によって中国伝統音楽を子どもへ伝えることにも通じているというるのである。

ピアノ学習者やその家族なども編曲以前のものとの民謡を知っていることが多く、そのとき、編曲された中国ピアノ作品は、それを演奏するピアノ学習者とともに、中国の人々が中国伝統音楽を感じるための一助になる。このことをピアノ演奏者が身をもって体験できるように、いわば「ピアノで『伝統音楽性』をもったピアノ作品を演奏する」ということが、「ほかでもない中国伝統音楽」に触れることにつながるのであり、そして伝統音楽を知り、のちに伝承するところまで言及できるようになるのである。

### 4.2 中国伝統音楽の音楽的特徴への気づき

『中国伝統音楽の音楽的特徴への気づき』では【中国ピアノ作品を通した中国伝統音楽と西洋音楽の違い】を感じ取るができる。ここでは、同じピアノを用いて西洋と中国の音楽を比較できることが、中国伝統音楽の音楽的特徴に気づき、中国伝統音楽文化を理解することにつながるといえる。

たとえばC氏は、西洋ピアノ作品と違い、中国ピアノ作品は旋律の線形表現が特徴的で、音、テンポの表現も自由であると語っている。それゆえ、中国ピアノ作品と西洋ピアノ作品を同じピアノで体験して比較することができ、その比較は中国ピアノ作品の背景にある自文化の理解、また中国伝統音楽への知見を深めることにつながると考えられる。そしてこれは、中国ピアノ作品の演奏が中国伝統音楽の伝承に適することに通じているのである。

D氏は、中国ピアノ作品の多くは中国伝統音楽でよく使用されている五音音階で創作されていると語っている。つまり、中国ピアノ作品を通して、中国伝統音楽と西洋音楽の違いを感じ取ることが可能であるということである。中国ピアノ作品は、五音音階を用いた旋律や自由な律動といった音楽的要素と楽曲構造が西洋音楽と異なっている。たとえば中国ピアノ作品は、「散—慢—中—快—急—散」という方式に従うという特徴があり、西洋音楽におけるソナタ、変奏曲などの楽曲構造との間に違いがある。この「中国と西洋の音楽の違い」を感じ取ることが、ピアノという楽器一台で可能である。換言して、その違いをピアノ演奏者が

身をもって体験できる。こうした違いに関しては、D氏が語るように、中国の子どもにとって中国ピアノ作品が西洋のものよりもなじみがあり、弾きやすいところに着目できる。すなわち中国伝統音楽で多く使われる五音音階をもとにした作品をピアノで弾くことで、中国伝統音楽に接近することが可能だということである。それは、中国ピアノ作品の演奏による中国伝統音楽の伝承につながっていくといえよう。

#### 4.3 ピアノのもつ多様な役割

『ピアノのもつ多様な役割』では、【ピアノを用いた多彩な表現】、【中国伝統音楽の伴奏】というサブカテゴリーが導き出されたように、ピアノが中国伝統音楽と結びつくことについて語られている。ピアノ演奏における豊富な表現をもって、多くの中国ピアノ作品の中でほかの民族楽器の音や奏法をピアノで模倣することができる。また、伴奏楽器として中国伝統音楽の伴奏を務めることも多く、ピアノは中国伝統音楽とかかわっていわばアシストする機能も持っている。すなわちピアノを弾くというときに対象とする作品は、ピアノ作品にとどまらず、ほかの中国伝統音楽やそれに関する作品も含めて述べられるということである。

それぞれの国にはそれぞれに音楽文化があり、ピアノはその文化を感じ取るのに有効であると考えられる。というのも、まず中国ピアノ作品を通して自文化を理解し、その上で同じピアノを使って他国の文化も理解しようとすることができるからである。たとえば、中国においてピアノが普及し、ピアノの指導が中国伝統音楽の伝承に役立つと考えるD氏は、「自分たちの音楽文化を理解してはじめて外国の音楽文化と比較することができ、西洋の音楽文化をよりよく理解できる」と語っており、加えてピアノ作品を弾かせることが音楽文化理解にとって有利であるとも述べている。それはすなわち自文化を理解し、そして比較対象として外国の文化をも理解するために、中国ピアノ作品が重要になるということである。そしてそれができるときには、D氏自身がいうように、中国伝統音楽をピアノでうまく表現し、その結果伝統音楽文化に誇りをもつ可能性が現れるときなのである。こうした【ピアノを用いた多彩な表現】が可能となるのは、『中国伝統音楽の音楽的特徴への気づき』と関連付けられるように思われる。なぜならこのカテゴリーに関してD氏は、「西洋のピアノの作品は多くの分析と解説を行う必要があるのに対し、中国の曲は比較的簡単で子どもたちの上達が早く、興味をもったり好きになったりする」という趣旨の発言をしているからである。子どもにとって弾きやすいピアノ曲を用いることは、早い段階から、長期的に自国の音楽文化を理解していくために重要で

あって、そこからやがて将来的に西洋の音楽も中国の音楽も多彩な表現でうまく弾き分けることのできるピアノ奏者になるのである。

またピアノは、独奏や連弾、ピアノ協奏曲などといった形のほか、たとえば声楽やほかの楽器の伴奏として用いられることも多い。それは西洋の音楽を想起すれば多数の例を挙げられるのであるが、中国伝統音楽とかかわった作品の中でも同様に例示される。少年宮においてピアノで伴奏を多くこなしてきたD氏は、そうした伴奏の形で中国伝統音楽へのピアノの浸透性を面白いと述べており、それは西洋性と中国性の融合の面白さと結びつくと考えられる。D氏自身、ピアノのほか、たとえばヴァイオリンや二胡といった西洋楽器や中国伝統楽器にも触れてきており、そこで演奏する中国伝統音楽と西洋音楽の両者に触れる過程で、中国伝統音楽のよさを感じるようになったという。そうであるならば、伝承していくことを重視するとき、その伝承とは、ピアノが中国伝統音楽に介入するというよりも、中国伝統音楽がピアノを含む形、換言すれば中国性と西洋性が融合する形で成り立つといたうのではないだろうか。そのままの状態中国伝統音楽を伝承していくことは、現代の状況からいって非常に困難であるが、ピアノを伴奏に用いることで、伝統楽器の演奏はそのままの状態を保ちながら、受け継いでいくことが可能であると考えられる。ほかの中国伝統楽器の伝承が、ピアノの伴奏を含んで期待されるようになるのである。そのとき、ピアノによる中国伝統音楽の伝承の可能性がみえてくる。

なお二つのサブカテゴリーのうち【ピアノを用いた多彩な表現】はピアノ作品の有用性であるが、【中国伝統音楽の伴奏】はピアノ自体の有用性に結びつくものであるといえる。とはいえその伴奏は中国伝統音楽の伝承の観点からみて、ピアノという楽器がなす重要な部分である。なぜなら伴奏するということは中国伝統音楽に関与し、それを知るということになるからである。A氏は、中国伝統音楽の中の声楽作品の伴奏をすることによって、学生が中国伝統声楽作品に触れられることを述べている。中国ピアノ作品の歴史に沿って教授するところから中国伝統音楽の音楽表現を身につけることができると考え、自身も多くの伴奏を経験しているA氏は、中国伝統音楽にかかわる表現と関連してピアノ伴奏を用いているということができよう。そのとき、中国ピアノ作品の歴史と関わり合いながら、中国伝統音楽を知り、それを伝承していくことが可能となる。

カテゴリー『ピアノのもつ多様な役割』は、中国ピアノ作品を演奏することによって特に中国伝統音楽を

知り、そこから伝承につながっていく可能性を示す。

#### 4.4 ピアノによる中国伝統音楽の伝播

『ピアノによる中国伝統音楽の伝播』では【世界へのピアノの影響力】、【中国国内に対するピアノの影響力】から、中国ピアノ作品の演奏による中国伝統音楽の発信にみる伝承の可能性を述べるができる。

自身の身分を示すために中国ピアノ作品を用いるというB氏は、中国ピアノ作品の演奏によって、外国の観衆が中国ピアノ作品を通して、中国伝統音楽を感じ取れることを実感しているという。すなわち中国ピアノ作品による中国伝統音楽の広まりの可能性が現れている。海外におけるコンサートで中国ピアノ作品を弾くことが、いわば西洋音楽界に対しても、中国の音楽の理解を促すことにつながる。

またD氏は、少年宮に就いてから中国伝統音楽のよさを感じるようになったという。またD氏自身、教師をする中で、子どもが中国ピアノ作品を弾きたいと言い、たとえば民謡を編曲した中国ピアノ作品を口ずさむという経験をしていることからいって、子どもも西洋というよりも中国ピアノ作品を好む傾向をみることができる。中国ピアノ作品を積極的に活用していくことは、国内の子どもへの伝播という意味でも意義的であると考えられる。

中国音楽家協会2019年の統計データ<sup>6)</sup>によると、現在、中国でピアノを学ぶ子どもは3000万人を超え、さらにその数は毎年10%ずつ増加している。いわゆる、ピアノ学習のブームが起きているのである。西洋の楽器であるピアノは、二胡、古箏、琵琶、揚琴などの中国の伝統的な楽器をおさえ、現在の中国で最も影響力のある楽器になり、現代の中国の音楽教育において、代替不可能といえるまでの役割を果たしている。さらにコンサートなどの機会の多さ、中国ピアノ作品の演奏機会の多さからいって、ピアノのもっている影響力は大きいといえよう。ピアノでいわば「伝統音楽性」をもつピアノ作品を演奏することによって、よりひろく中国伝統音楽を流布することが可能なのである。

## 5. 結論

ここまで、中国伝統音楽の伝承に着目した、中国ピアノ作品を用いたピアノ教育の意義を考えてきた。本論文において問われうることとして示したものは、中国ピアノ作品を演奏することによって、ピアノ以外の楽器による中国伝統音楽の伝承よりもさらにその伝承の可能性が見いだされるか、あるいは、中国ピアノ作品を演奏することが、中国伝統音楽の伝承に適しているのか、であった。考察のなかにも適宜述べているが、

インタビュー結果の分析を通して、カテゴリー『ピアノのもつ多様な役割』は前者に、カテゴリー『中国伝統音楽のピアノ編曲作品への興味関心』、『中国伝統音楽の音楽的特徴への気づき』、『ピアノによる中国伝統音楽の伝播』は後者に対応しているといえよう。ピアノ指導者の語りからは、中国ピアノ作品自体がもっている伝承的な意義、あるいはピアノという楽器を演奏すること自体の伝承的な利点がみられた。中国伝統音楽の伝承に着目した、中国ピアノ作品を用いたピアノ教育の意義が、ピアノ指導者それぞれの教育とかがわったインタビューから明らかになった。

最後に、分析の中で現れたいくつかの着目できる点を挙げておきたい。

第一に、「中国らしさ」である。それは、中国伝統音楽を中国ピアノ作品として扱いやすい形で提供することや、子どもが急に興味をもつきっかけとなった「中国らしさ」を反映した音の流れに興味関心が向くことから着目できる。

第二に、「比較」である。それは、同じピアノを用いて西洋と中国の文化を比較できることから着目できる。自国の文化を理解し、そして他国の文化をも理解することにつながることは、一定の意義があるであろう。

第三に、「融合」である。たとえばピアノ伴奏について述べる中で、伝承は、ピアノが中国伝統音楽に介入するというよりも、中国伝統音楽がピアノを含む(西洋性と中国性が融合する)形で成り立つ可能性を述べた。そのままで中国伝統音楽の伝承が難しい現代において、身近に存在するピアノと融合することで、より伝承の可能性を高められるのではないか、ということである。ほかの中国伝統楽器の伝承を、ピアノを含んで期待するのである。

現代において、中国ピアノ作品を通して、さまざまな中国伝統音楽や、中国伝統楽器の奏法に触れやすいといえる。換言すれば、中国伝統音楽や伝統楽器には非常に多くの種類があり、それらをすべて取り扱うことは難しいが、ピアノという楽器を用いることで、それら複数の中国伝統音楽や伝統楽器に関することの一部を感じ取ることができるということである。その意味で、ピアノを用いて、中国ピアノ作品を演奏することは、中国伝統音楽や伝統楽器から切り離されず、それらについて知り、考える方法として現実的なのである。ただ、ピアノを用いたいわば伝承の流れが加速することによって、もしかすると、中国伝統音楽や伝統楽器が将来的に単独でひろがりをみせるかもしれない。

今後の課題となるのは、中国伝統音楽の伝承につな

がる中国ピアノ作品について、不十分と考えられる点を追究し、その改善を検討することである。中国伝統音楽の伝承に着目した、中国ピアノ作品を用いたピアノ教育の意義が明らかになったが、現代においてはまだまだ十分に中国ピアノ作品が演奏されている状況ではないからである。たとえば、中国ピアノ作品のための教材の系統性の不足や、指導者側の西洋音楽への傾倒、中国ピアノ作品に対する作品賞の設置などによるさらなる客観的な評価が挙げられる。

## 【注】

- 1) 改革開放とは、中華人民共和国の鄧小平の指導体制の下で、1978年12月に開催された「中国共産党第十一期中央委員会第三回全体会議」で提出、その後開始された中国国内体制の改革及び対外開放政策のことである。
- 2) 阿片戦争（アヘンせんそう、中：第一次鴉片戦争、英：First Opium War）は、清とイギリスの間で1840年から2年間にわたり行われた戦争である。
- 3) 211プロジェクトは中華人民共和国教育部が1995年に定めたもので、21世紀に向けて中国の100の大学に重点的に投資していくとしたもの。これら大学は「211工程重点大学」あるいは「211重点大学」と呼ばれ、それまでの「国家重点大学」という言葉に取って替わった。
- 4) 双一流（そういちりゅう）とは、世界一流大学・一流学科の略称である。中華人民共和国が2010年代に実施をはじめた高等教育政策である。
- 5) 中国伝統音楽の用語で、ゆっくりとしたテンポ、自由なリズムを指す。中国の伝統器楽曲や民謡、

戯曲などによく用いられる。

- 6) 劉瑤琪（2019）「中国琴童総数達3000万併以毎年10%的速度増長」慧聰教育網，2020/7/15/ 参照。  
<http://info.edu.hc360.com/2019/11/220925840201.shtml>

## 【参考文献】

### 日本語文献

王文（2010）「中国と日本でのアレクサンドル・チェレプニンの活動における音楽教育的意義に関する研究」エリザベト音楽大学博士論文。

### 中国語文献

- 陳旭（2001）「中国鋼琴音樂的創作及其啓示」『音樂研究』北方音樂出版社，pp.96-103。
- 代百生（1999）「根拠傳統音樂改編的中国鋼琴曲的演奏特色」『音樂研究』第1期，pp.51-57。
- 馮効剛（2007）「20世紀前半的中国鋼琴音樂文化」南京芸術学院博士論文。
- 李延君（2018）「伝統音楽的伝承与発展」『芸術品鑑』第9期，pp.56-57。
- 王躍華・杜亜雄（2013）『中国伝統音楽概論』福建教育出版社。
- 周汀亭（2009）「論中国鋼琴作品」西北師範大学修士論文。

### Web 資料

- 劉瑤琪（2019）「中国琴童総数達3000万併以毎年10%的速度増長」慧聰教育網，2020/7/15/ 参照。  
<http://info.edu.hc360.com/2019/11/220925840201.shtml>